

# 衣食住遊

第六回

## あした着る機能

文井上 雅人 Inoue Masahito

いのうえまさひと／歴史社会学者、武庫川女子大学生活環境学科講師。東京大学大学院人文社会系研究科博士後期課程満期退学。京都精華大学人文学部准教授を経て現職。専門は日本近現代の物質生活史、デザイン史、ファッション史。著書に『洋服と日本人——国民服というモード』（2001年、廣済堂ライブラリー）ほか。

衣服の起原は一本の紐である、という説がある。手に持った石や棒などの道具を紐に引っ掛けることで、両手を解放したというのだ。片手が塞がっているのと両手が自由なのでは、活動の広がりや随分と違う。疑わしい説ではあるが、説得力のある話でもある。近年、速乾性や保温性を売りにした機能性衣料というのが話題になっているが、それどころか人類は最初の最初から、かなり高度な機能性衣料を身に着けていたのだ、というのは面白い考えだ。

「着る」とは元来、機能を纏まとうことだという考えは、マーシャル・マクルーハンの考えに近い。マクルーハンは、およそ全ての道具を、身体機能の拡張として理解した。例えばカナヅチは物を叩くという拳の機能の拡張であり、自動車は速く走るという足の機能の拡張である。マクルーハンの世界観によれば、およそ全ての道具は、機能拡張として身体に接続することができる。つまり、およそ全ての道具は「着ることができるとだ。人類は、より機能を拡張してくれる様々なかたちの「服」を発明してきたし、これからおそらく発明して、着込んでいくことになるだろう。

道具を「服」と捉えたり、使うことを「着る」と表現したりするのは言い過ぎな感じもするが、現在、究極の道具のひとつとして掲げられているのが「パワードスーツ」であることを考えると、あなたがち大げさともいえない。日本のいわゆる「ロボットアニメ」に出てくる主人公が乗り込む人型の機械、あれが「パ



ワードスーツ」だ。「ロボットアニメ」に出てくるメカが、実はほとんど「ロボット」ではないというのも面白い。

パワードスーツは機能拡張の道具であり、自律した制御システムであるロボットとは違うものである。その名の通り「スーツ」なのだ。乗るものではあるが、着るものでもある。これらは着ることによって身体機能を著しく拡張する道具である。こういった機械は、いうならばシヨベルカーと同じである。しかし現在注目されているのは、シヨベルカーというよりは、電動アシスト自転車程度の軽便なものだろう。実際に、昨今開発されつつある介護用や肉体労働用のパワードスーツには、人間が加えた微弱な力を感じしモーターによって増幅する、電動アシスト自転車自転車のコンピュータ制御システムが応用されている。

パワードスーツは分かりやすく「着る」道具だが、次々に開発され普及しはじめている、まさしく「ウェアラブル」な端末には、何を「着る」のか分かりにくいものも多い。ネットワークに接続されて便利になることもいいことだが、身につけるに及んでは、それらが身体のような機能を拡張しているのか、という素朴な地点に立ち返って、よく考えてみた方がいいかもしれない。ひとつとしたら我々は、自分の身体を拡張しているのではなく、コンピュータ制御の端末を身体に組み込むことによって、自分の身体を他人の身体機能を拡張する「服」として提供しているだけかもしれないのだ。